

第104回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成27年7月15日(水) 15:00~17:00
- 2 場所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

- ・アレキサンダー・ベネット 国際部教授
発表テーマ「日本文化の象徴としての剣道」
- ・中林 安雄 化学生命工学部教授
発表テーマ「抗がん剤としての金属錯体の開発～副作用の低減を目指して～」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

- ① 平成26年度就職・キャリア支援状況について 資料1
- ② 平成27年度国際インターンシップの実施について 資料2
- ③ マルチリンガル・イマージョン学習スペース (Mi-Room) ^{マイルーム} の開設について 資料3
- ④ 文部科学省平成27年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
採択結果について 資料4
- ⑤ 平成27年度春学期卒業式および大学院学位記授与式、
秋学期入学式の挙行について 資料5
- ⑥ ナレッジキャピタルThe ^ザ Labにおける本学展示について 資料6
- ⑦ 夏休み小・中・高校生向けセミナーの開催について 資料7
- ⑧ 関西大学フェスティバル in 九州の開催について 資料8
- ⑨ 平成27年度地方教育懇談会の開催について 資料9
- ⑩ 関大生の活躍について 資料10
- ⑪ 名誉博士号の授与について 資料11

4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、
アレキサンダー・ベネット国際部教授、中林安雄化学生命工学部教授、
池田佳子国際部教授、宇恵勝也キャリアセンター所長、
吉原健二キャリアセンター事務局長、松並久典総合企画室長、
中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第442号、第443号
- (2) 関西大学ニューズレター「Reed」No. 41
- (3) 関西大学総合案内2015
- (4) 関西大学総合案内データ集2015
- (5) 行事予定表(7月~9月)

以上

【次回(第105回)記者懇談会開催予定】

日時:平成27年9月16日(水) 15:30~17:30
場所:千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

日本文化の象徴としての剣道

国際部教授 アレキサンダー・ベネット

【概要】

『Kendo: Culture of the Sword』(University of California Press, 2015) は、日本武道である剣術・剣道について初めて英語で歴史・文化・思想・政治的な詳細を各時代にわたって総括的に分析する学術書であります。中世武芸流派の誕生から今日の世界的競技スポーツとしての剣道の進化経緯を描きながら日本の剣(つるぎ)文化で繰り返し行われる「伝統の創造」の過程を明らかにし、歴史の中でどのように武士政権・明治以降の政権のイデオロギーや要求が変化してきたかについて論じています。現在は、日本の若者に日本独自の伝統文化への賞賛を再燃させ、また国外に対する「ソフトパワー」の手段として国際理解を得るために日本政府が追い求めるより穏やかな文化ナショナリズムという傾向が見られます。日本文化を代表する剣道の人気は世界的に高まっています。しかしながら、剣道の国際普及を成し遂げると同時に文化的排他性・文化帝国主義的な矛盾も見られます。これは、剣道という文化が日本人のアイデンティティと密に結びついているからです。

<http://www.ucpress.edu/book.php?isbn=9780520284371>

【プロフィール】

1970年、ニュージーランドのクライストチャーチ生まれる。1987年に交換留学生として初来日。千葉県の高校の部活動で剣道を始めたのをきっかけに武道に惹かれ武士道にも深い関心を抱くようになる。2001年に京都大学大学院人間・環境研究科博士課程修了。国際日本文化研究センター助手、帝京大学日本文化学科講師等を経て09年より関西大学国際部教授。2011年の第5回世界なぎなた選手権で準優勝。2012年にカンタベリー大学院博士後期課程言語・文化研究科日本文化修了で2つ目の博士号取得。剣道教士7段、居合道5段、なぎなた5段、短剣道3段、銃剣道3段、古武道など。日本武道学会理事、国際なぎなた連盟副会長、全日本剣道連盟国際委員、NZ剣道連盟ナショナルチーム総監督。01年より、世界で初めての英語の剣道雑誌『KENDO World』を発行している。最近の著書に『武士の精神とその歩み』(思文閣・2009)『日本人の知らない武士道』(文春新書・2013)『Hagakure: The Secret Wisdom of the Samurai』(Tuttle・2014)『Kendo: Culture of the Sword』(University of California Press・2015)ほか。

抗がん剤としての金属錯体の開発

～ 副作用の低減を目指して ～

化学生命工学部教授 中林 安雄

【概 要】

抗がん剤として最も臨床の場で使用されている金属錯体は、単純な構造である低分子白金(II)錯体のシスプラチン(*cis*-[PtCl₂(NH₃)₂])であり、多くのがんに切れ味鋭く作用する。しかしながら、このシスプラチンには二つの大きな欠点がある。厳しい副作用を伴うことと耐性ががんを誘発しやすい(繰り返し使用すると効果が低下する)ことである。特に、食欲不振、嘔吐、脱毛、白血球の減少等の副作用はがん治療の大きなネックになっている。切れ味鋭く、副作用がなければ言うことはないが、切れ味が鋭い抗がん剤ほど強い副作用があるという悲しい現実がある。そこで、このような欠点を克服するために、白金も含めた他の金属錯体による新規な抗がん作用の発現、特に副作用の低減を目指した研究を行っている。

化学療法剤であるシスプラチンは、細胞内のターゲット分子 DNA の構成分子であるグアニンやアデニンに結合して、DNA の構造を歪めることにより抗がん作用が発現する。その際、がん細胞だけでなく正常細胞にも作用するため、厳しい副作用を伴うことになる。このようなことに鑑み、がん細胞に選択的に作用するような反応系が構築できれば、大幅な副作用の低減化が期待できる。

生体内では酸素 O₂ を利用してエネルギーを作り出しているが、その際に活性酸素が発生する場合がある。この活性酸素の一種である過酸化水素 H₂O₂ は、正常細胞では高い活性をもつ酵素カタラーゼが一瞬で水 H₂O に分解している。一方、がん細胞はこのカタラーゼ活性が低いことが報告されている。この違いを利用して、がん細胞内で H₂O₂ と金属錯体から、さらに反応性の高い活性酸素であるヒドロキシルラジカル・OH を発生させる(フェントン型反応)。この・OH ががん細胞の DNA を切断することにより抗がん作用が発現することになる。この反応系によって副作用の低減化が期待できるが、具体的なデータは当日紹介する。

【プロフィール】

1955 年徳島県生まれ。関西大学化学生命工学部教授。専門は、錯体化学、生物無機化学。徳島大学工学部卒業、徳島大学大学院工学研究科修士課程修了、神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了。学術博士。2007 年 4 月より現職。